

武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

神はわがイロハ歌

――詩篇第111篇――

1973年7月1日

小池辰雄

ヘブライ語の「アレフベート」 神のイロハ歌 人間と自然と神 信行言一如 根源から自然に現象 イエスは霊体として現れざるを得ない 「よしあしの葉をひつ布ひて夕涼み」 詩「わが砲兵士官」

【詩篇111】

- 1 エホバを讃めたたえよ
我はなおきものの会あるいは公会にて心をつくしてエホバに感謝せん
- 2 エホバのみわざは大いなり
すべてその事跡をしたうものは之をかんがえ究む
- 3 その行いたもうところは栄光ありまた稜威あり
その公義はとこしえに失することなし
- 4 エホバはその奇しきみわざを人のところに記しめたまえり
エホバはめぐみと憐憫とにて充ちたもう
- 5 エホバは己をおそるるものに糧をあたえたまえり
またその契約をとこしえに心にとめたまわん
- 6 エホバはもろもろの国の所領をおのれの民にあたえて
その作為のちからを之にあらわしたまえり
- 7 その手のみわざは真実なり公義なり
そのもろもろの訓諭はかたし
- 8 これらは世々かぎりなく堅くたち
真実と正直とにてなれり
- 9 エホバはそのために救贖をほどこし
その契約をとこしえに立てたまえり
- 10 エホバの名は聖にしてあがむべきなり
エホバをおそるるは智慧のはじめなり
これらを行うものは皆あきらかなる聰ある人なり
エホバの頌美はとこしえに失することなし



●ヘブライ語の「アレフベート」

詩篇111篇と112篇は姉妹篇なんです。しかも、表題に「イロハ歌」と書きましたように、アルファベット順に節が、あるいは句がずらーっと、頭文字がアルファベットの順に並んでいる。そういう多少、技巧をこらした歌なんです。

そこで、ついでにあなた方は、このヘブライ語を御存知でない方は、ヘブライ語のアルファベットも今日、覚えてしまっていたきたい。

「א (アレフ 1)」は「牡牛」という意味です。みんな文字に意味がある。

「ב (ベート 2)」は「家」のことです。

「ג (ギメル 3)」は「らくだ」「キヤメル」というでしょ、そのもとが「ギメル」という。

「ד (ダレト 4)」は「戸」です。

「ה (ヘー 5)」というのは「格子窓」のことです。あるいは空気のぬけた穴みたいなもの。

「ו (ワウ 6)」は釣竿の「鉤^{かぎ}」のこと。

「ז (ザイン 7)」は武器のことです。

「ח (ヘート 8)」はドイツ語の「ch」で喉の発音。これは籬^{まがき}、石垣、フェンスのこと。

「ט (テート 9)」は「蛇」を表している。

「י (ヨード 10)」は「律法の一点一画」という、「手」のこと。

「כ (カフ 20)」は「曲がつた手」という。

«ל (ラメド 30)」はちょうど「L」にあたる。羊飼いが駆り立てるところの「棒」のこと。

«מ (メーム 40)」は「水」のこと。

«נ (ヌーン 50)」は「魚」のこと。

«ס (サメク 60)」は「支柱」、または比喩的な意味になって、「擁護する人、保護する人」。

«ע (アイン 70)」は喉の音です。ヘブライ語はこの喉の音が多い。「目玉」のこと。

«פ (ペー 80)」は英語の「P」にあたる。「口」のこと。

«צ (ツアーディ 90)」は魚を採るときの「鉤」、フィッシュフックというような意味。

«ק (コーフ 100)」は「針」あるいは頭の後ろの「後頭部」という意味がある。

«ר (レーシュ 200)」は「R」にあたる。「頭」のこと。

«ש (シーン 300)」は「スィーン」は形は同じで点の位置がちがう。「歯」のこと。

«ת (タウ 400)」はある徴のこと、それから「十字架」。

「アルファにしてオメガ」というときには、ヘブライ語では「アレフとタウ」なんです。

それで、ついでに言っておきますが、ヘブライ語で数を表すときに、この順に1、2、3、4……となる。

それで、「色は匂えど散りぬるを」というような具合に、これが「アレフ」「ベート」「ギメル」の順に、節がそういった多少技巧的にできている。今日はその111篇です。

111は「א・ב (1・10・100)」と書けばいい。また別なヘブライ語の言葉にもなっている。



●神のイロハ歌

「エホバを讃めたたえよ」

一番先に「主を讃めたたえよ」「ハレルヤー」と書いてある。ヘブライ語で

「הללוּ」(ハレルヤー)

と書く。「ヤー」は

「יהוה」(ヤハウェ)

と書く。「ヤーヴェー(ヤハウェ)」は、申し上げている通り、「存在するもの」。「ハーヤー」という字は「存在する」という字ですから、それからきた固有名詞です。非常に固有名詞に意味がある。ドイツ語でいうと「デアザイエンデ」(der Seiende)、英語で「ザビーイंक」(the Being)という。「ハレルー」というのは、「汝ら讃めたたえよ」という形なんです。

「君たち、ヤーヴェーを讃めたたえよ」

が「ハレルーヤー」という字です。

我はなおきものの会あるいは公会にて

「我」とはこの詩人のこと。「公会」は教会みたいなもの。

心をつくしてエホバに感謝せん

一人でなくて、皆で一緒にというわけです。「君たち讃めたたえよ」と言つて、自分は皆と集まりの者と一緒に、「心をつくして」という、非常に強い言葉です。全身をもつて、すべての心をもつてと。「すべての心」と書いてある。この第1節に「א(アレフ、1)」と「ב(ベ、2)」(公会)があるわけです。

第2節が、「ג(ギメル 3)」と「ד(ダレト 4)」になる。

エホバのみわざは大いなり

「大いなるかな」という字が「ガードリーム」といつて、「ギメル」に当たる字が出てくる。

「大いなるかな、ヤーヴェーの諸々のわざは」

と。その次は、

すべてその事跡をしたうものは之をかんがえ究む〔尋ね求める〕

それから3節に「ה(ヘー 5)」が来て、

その行いたもうところは栄光ありまた稜威あり

「ו(ワウ 6)」がきて、

その公義はとこしえに失することなし〔立たん〕

確立する、失うことがないと。

それから4節に「ז(ザイン 7)」がきて、

4 エホバはその奇しきみわざを人のこころに記しめたまへり エホバはめぐみ
と憐憫とにて充ちたもう

今度は「ח(ヘート 8)」きまして、



エホバはめぐみと憐憫^{あわれみ}にて充ちたまう

「めぐみ」と「あわれみ」という言葉がよく対句で出てきます。

5 エホバは己^{みづか}をおさるるものに糧^{かて}をあたえたまえり

ここが「u(テート 9)」と「・(ヨード 10)」です。

またその契約をとしえに心にとめたまわん

だいたい1節でもつて二つずつ進んでいく。それで全体で22行になるわけです。

6 節に「l, c(カフ 20)」がきまして、

6 エホバはもろもろの国の所領をおのれの民にあたえてその作爲^{みわざ}のちからを之にあらわしたまえり

「エホバはその御業の力をその民に示して、これに異邦人らの譲り^{ゆず}を与えたまえり」

と。これが「l, c(カフ 20)」と「k(ラメド 30)」。

それから7節に「o, n(メーム 40)」がきて、

7 その手^{みで}のみわざは眞実^{まこと}なり公義^{ただしき}なり

「i, c(メーン 50)」がきて、

そのもろもろの訓諭^{みさとし}はかたし

今度は8節で「o(サメク 60)」がきて、

8 これらは世々かぎりなく堅く^{かた}たち

「v(アイン 70)」がきて、

眞実^{まこと}と正直^{なおき}とにてなれり

9 節で「q, o(ペー 80)」がきて、

9 エホバはそのために救贖^{あがない}をほどこし

「y, v(ツアーディ 90)」がきて、

その契約をとしえに立てたまえり

「f(コーフ 100)」がきて、

エホバの名は聖^{みな}にしてあがむべきなり「畏るべきなり」

9 節は即ち3つある。

10 節に「r(レーシュ 20)」がきて、

10 エホバをおさるるは智慧のはじめなり

「u(シーン 30)」がきて、

これらを行うものは皆あきらかなる聰^{さとい}ある人なり

「n(タウ 400)」がきて、

エホバの頌美^{ほまれ}はとしえに失^うすることなし「立たん」

そういうことになっています。いかにも教訓的な、あるいは礼拝的な内容の文句ですね。これをこのままただ読んでいたのでは、本当は面白くない。ところがしかし、この中にも



う福音がちゃんとあるわけです。私たちはこのヘブライ人的な律法的な世界の、あるいは祭儀的な宗教の、ただそういう歌としてこれを見るのではなくて――これを私は「神のイロハ歌」と書きましたけれども――ここではみな、

「エホバは、エホバは」

といつて、三人称的に言っているわけです。これは我々はむしろ

「汝は」

と、二人称で読む。二人称で読んでいかないと、本当の祈りにはならない。「エホバ」を「汝」に変えてしまう。まあ一番先の「ヤーヴェーを讃めたたえよ」は、皆に言っているから仕方がないでしょうけれども。

「我はこの直き者の集い、公会にて心をつくしてヤーヴェーに、汝に感謝す」

と。宗教の世界はどうも、ややもするとお題目になってしまいうし、習慣になってしまいうし、気が抜けてしまう。それをやっていたのでは、

「もう集会なんか面倒臭い」

なんていうことになってしまふ、しまいには。今日は詩篇111篇をなにも逐一解説するわけではない。

●人間と自然と神

……（昭和大学の富士吉田キャンパスでドイツ語授業で講義したこと省略）……、彼らは自然の中に非常にいたから、

「君たちは自然に囲まれている。自然に囲まれているときに人間は本当に人間らしくなる。都会の人間はどうしてもガサガサになる。我々は我々の生活から自然を離れたら、人間は自然の恩恵なしには生きていられない。たとえば、今、都会でもって水が断水してしまったら、どういうことになるか、東京なんか。アフリカの西の方は今、断水で大飢饉で倒れていく惨憺たる光景が写真に載っている。世界にいろいろな妙ちくりんな現象が起きてくる。

この人間と自然。もう一つ、大事なものがある。これは大事なものの、神さままである。神と自然はまたこれを切り離すことのできない。そのようにして、本当にそこに生きていたドイツの最大の詩人は誰だったか。それはゲーテだ。ゲーテという人は本当にこの自然において神を見ていた。神は自然の中に溶けている。

「自然は最大の本である。活ける本である」

と彼は言った。ナポレオンは福音書をセントヘレナでもって、

「これは文字ではない。活けるものだ」

とナポレオンは最後に素晴らしいことを言った。彼は福音書を開いて、そしてこのキリストに本当に降参した。どんな英雄もキリストにはかなわん。



本当の人間性。日本人が本当の人間性を回復しようと思ったら、どうしてもこの構造とにかく——どうということでもいいけれども——「人間と自然と神」という、本当にそこに生きようにならなかつたら、日本人は本当に健全なことにならない。」

と、いろんなことを言っているうちに、ついに福音の話になってしまった。これも私の止むを得ざるなりで、しゃべってしまった。どこへ行つても、自然に出てくるわけですよ。

「医学の一番の祖は誰だね？」

と聞いたら、どうもよくわからなかつたらしい。ヒポクラテスです。紀元前6世紀頃の人です。このヒポクラテスが有名な、

「人生は短くして、技術の世界は悠久である。医学はなかなか修めきれない」

と慨嘆した。けれども、彼が言った大事なことをみんなあまり知らないらしい。ヒポクラテスは言っている、

「人間は本来、賜つているところの生命力を持っている。この生命力を医術や医学や薬や何かで横から、うまくない時に助ける。産婆役、助けることが、医のわざなので、大事なことは本来持つているところの生命力である。これが実は一番本当に癒す力を自ら持つている」

と。それはもちろん、ヒポクラテスは福音の世界ではないですから、神のことははっきりは言いませんけれども、しかし、そういった自然がそのように人間を構成しているということには気がついていて。その自然を損なってしまったら、これはどうにもならん。日本は危ないですよ、正直。医学は

「ハイルクンデ」(Heilkunde 医学、医術)

だから、「ハイレ」(heilen、癒す)という字は、魂を救うことと体を癒すことを、どちらも「ハイレ」(heilen)という。キリストは

「ハイル」(Heiland、救世主)

という。キリストは心身共に救ってしまった。キリストこそは本当のハイルクンデの体現者なんだ。

「最高の医者是谁か？」

といったら、

「キリスト」

と言わなくてはいかん。キリストが本当のお医者さん。それを、その魂の世界をいい加減にして、体ばかり解剖したり何かしたって、それはダメだ。

というようなことで、私は素人だけれども——しょうがない——一番本質的なことを語ってきたわけです。何も医学に限らない。政治のことでも、経済のことでも、何のことでも結局、本当はキリストのハイルクンデにぶつかなければダメなんです、キリストの医学



に、キリストの救いの医学に、救いの学問に。学問ではないんだ本当は。だから、私たちがこの日曜毎に福音をやるというのは――私は今日は本当は調子がわるい、少し風邪で熱っぽいけれども――ここで立っているうちに、だんだん楽になってきた。それはこのハイルクンデがくるから。

ですから、私たちは、「エホバは」なんて、三人称で呑気に言っていられない。

「汝は、あなたは」

と言って、この詩篇を読み変えていかななくてはいいかん。

●信行言一如

2 汝のみわざは大いなり

と。歴史的にもまた自分の個人の生涯においても、いかに神のわざが大いなるか。

この凡てのみわざを喜ぶ者はこれを尋ね求める。

と。神さま、あなたを尋ね求める。いや実に、こちらから尋ね求めるところではない。向こうから一所懸命で我々を尋ね求めてくださっているわけです。いつも逆なんです、方向はいつも上から、何でも上から、この上からの尋ね求めです。

「求めよ、さらば与えられん」

とキリストは言われたけれども、キリストの言葉のもうひとつ奥を読まなくては。

「私はお前を求めているんだよ。だから、必ず与えられるよ」

と。

「与えられん」

ではない。

「与えられるぞ」

と、もう大胆に訳していくといい。ギリシア語やヘブライ語の、もうひとつ奥の神さまの根源語 (Ur-Word) を読んだら、そいつを訳す。私はいつかそのうちにそういう乱暴な聖書を作ろうかと思う。世の中に通じなくなっているよ。けれども、本当の人には通ずる。ギリシア語やヘブライ語のできる人が一所懸命で

「これはこうだ、ああだ」

なんて、そんなことではないんです。

「求めよ、さらば与えられる」

「尋ねよ、さらば見いださん」

「もう私はお前をちゃんと見いだしている」

「門を叩け、さらば開かれん」

「私はお前の心の扉を叩いているではないか。なぜ、早く開かないか」

というわけだ、福音書のあの言葉は。非常に簡明な簡潔な力強い註を書いてやろうかと思う。



あまり長いのはしょうがないから。ビリビリするような(笑)。私は、とにかく、それでなければもたないです。あなた方はもつかもしれないけれども。あなた方は余裕^{しやく}々だからね。

3 その行いたもうところは栄光^{さかえ}あり また稜威^{みいつ}あり その公義^{ただしき}はとこしえに失^うすることなし

「始めに行為あり」と、これは本当にそうです。何かに書いてあったな、

「教師というものは、言つて行わない」

という。「やれ」だの「やるな」なんて人に言っていて、自分は何もしない。それが先生というものだ。そんな先生だったらしょうがない。それが「言つて、行わない」。今度は、

「言いもしなければ、行いもしない」

そういうズベ公がいる。それから、

「言わないで、行う」

これはだいぶいい。

「言つて、行う」

これは最高の世界。そう書いてある。ところが、私はもうひとつ書きたいのがある。これを引っくり返さなくては。言うより行いが先です。

「始めに行為あり。それから言う」

と。何か事をやってから、それから「こういうことをしましたよ」と。

「行つて、言わない」

この二つはどっちもいい、逆にしたやつは。言わなくたって分かっている。行為自身が言葉だから。即ち、行^{ぎやうげん}言^{げんぎやう}――言行と、言行一如と言ったけれども――今日は、言行一如という。『ファウスト』の中でゲーテがファウストをしてヨハネ伝一章一節を、

「始めに言^{ことば}あり」

ではなくて、

「始めに行為あり」

と翻訳させて、やつと気がおさまったという。

「その当時のキリスト教はとかく言葉のキリスト教だからダメだ。もっと心と行為のキリスト教にならなければダメだ」

と、ゲーテは『エッカーマンとの対話』の中でも言っている。しかし、その心とか行為ということをとりだして言う必要はない。本当は、言行一如。その上にもうひとつあるんだ、本当は。信です。信^{しん}行^{ぎやう}言^{げん}一如です。信ずるということ。

「神のわざはこれ信ずるこれなり」

という。今度の「ハレルヤ」に書くからね。



〔註：「ハレルヤ」32号（1973年7月）「信仰の奥義」——ヨハネ6・29——第5回春期特別集会 1973年3月21〜23日（内房の保田温泉にて）第1回集会 講筵要旨〕

「信ずる」とはもつとも烈しい実はそれ自体が行為である。心の状態ではない。「信ずる」ということがもつとも烈しい全身的な行為なんです。「ウルタート」(Urta)、信ずることが根源の行為である。それから、

「エホバは^{おそ}を畏れる者に^{かて}糧を与える」

ここにいくつか「神さまは」という、いろいろなことが書いてあるね。いろんな項目を、今度はあなた方が誰かイロハ歌にしてごらん。「一つとや」なんてね(笑)。「一つとヤー」の「ヤー」は「ヤーヴェー」だから。神さまをおそれる。これは「畏」の字を書かなくてはダメ。畏神、畏神敬神。これは恐れこわがるのではない。畏れかしこむというのは、畏れることはこちらが平伏^{ひれふ}すること。

「平伏し」

の態勢です。平伏しは同時に

「投身」

からだを投げ出すこと。どこへ投げ出すか。神さまの中に、キリストの中にです。恐れてひるむのではない。畏れかしこむということは、もの凄いその中に自分を投げ入れることになる。平伏して投げ入れることです。本当の畏れと信頼とがまた一つになる。

●根源から自然に現象

何か、取り澄ました子供というのは可愛いくないんだよね。とつついてくる、泣き叫んでやってくる、そういう子供は可愛いわけです、神さまはそういうのが。あなた方は決してしり込みしてはダメですよ。全存在でもつていく。傲慢な気持はいかん。けれども、本当に平伏して、あるがままの自分を投げかけていくことです。

どうして、くすぶるんですかね。私はわからないんだ、くすぶっているのが。クリスチャンでくすぶっているなんていうのは、それはクリスチャンではないんだよね。意識過剰で、何だかんだと考えてばかりいる。デカルトはけしからんことを言った。

「われ思つゆえに我あり」

なんて。

「われ思ふゆえに我あらず」

なんだ、本当は。現代人の意識過剰はけしからん。デカルトのあの言葉は、それは哲学の上ではそういうことが言えるでしょうけれども。

「あれはダメだ」

とシュヴァイツァーが言った。シュヴァイツァーという人は非常に生命のことを言っている。



「生命に対する畏敬の念」

という。この生命の生命は神さまですから。シュヴァイツァーはそこまでもつとはつきり言ってもらいたかったんだけど。「生命に対する」と言っただけで、生命の生命は、我々に生命を与えてくれるものは、

「我は創造の医者なり」

という神さまです。医者は生命を与えるところのもの。申命記の中にある、

「我は医者なり」

という言葉が。神さまは生命、霊的霊生を持つている。霊的生命を持つている。

いいですか。こちら側の状態がどうであろうと、そんなことはもう全然これからは問題にしないで、相手だけです、問題は。問題はないんです、相手というのは。神・キリストというのは問題がない。

「我を見し者は父を見しなり」

というキリストですから、このキリストの中に入っていけば、どうしてもそういう現実には本気になる。「頭で信ずる」とか何とかということではない。本当の現^{うつ}の世界ですから。

「糧を与えたもう」というと、何かおいしいものでも降ってくるかと思う。それは「マナ」は降ってきたさ、荒野で。けれども、

5 エホバは己をおそるるものに糧^{かて}をあたえたまへり

「汝を畏れる者に糧を与える」

というのは、「汝」自身が糧ですから。

「我を食らえ、我を飲め」

というキリストです。今度は「汝」という中に、神とキリストとが一つになっている。「糧を与えたもう」という。キリスト自身が神さまの表現体としての「言^{ことば}」でしょうが。キリストは活ける言。

「わが言は霊なり生命なり」

と言ったでしょ。直ちにキリストが糧である。

「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」

というけれども、それは半面の真理だ。

「健全なる魂が健全なる肉体を創造している」

魂がキリストという糧を食べると、我々の肉体が健全なことになっていく。どんなに病気をしても大丈夫ですよ、その病気の奥の世界に霊体がくるから、霊的な体^{からだ}が。どうせ我々の肉体はそのうちにダメになるんだよ。けれども、ダメになる肉体の奥の方にダメにならないやつがある。

何年前かにギリシア・カトリックの坊さん、ギリシア半島の小さな島「アトス山」に修道院がある。その坊さんが非常な霊的な人物で、それが死んだら、肉体が硬直しない。柔



らかい。そして体から何か水みたいなものが流れている。

「汝の腹より水が湧き出づべし」

とキリストが言ったように、文字通り。そこへ盲人だの跛者だのが行ったらみな治ってしまふ。それを医者がちゃんと見ている。大変なことだと。

そういう、とにかく、我々の本当の、聖書の本当の現実というものは、研究や解釈で分かるような世界ではない。ですから、使徒行伝だの、いわんやキリストにおいて、また預言者も――しかし、新約の方がもちろんすごいですが、これは聖霊がきているから――この御霊は全世界のものと代えることができません、はつきり。

「人間小池がどうだ」

と、そんなことは問題ではない。その中に来てござるところの御霊が、これはどうにも世界中の何ものとも代えることができません。

だから、「汝の憐れみ」とか、「汝のわざ」とか、「汝の恵み」とかいう、この「汝」は本当に霊生でありますから、それが働くところのわざだとか恵みだとか――みんな何か結果を言っているのではない――それが自然に起きるところの現象を言っているわけです。現象そのものにこだわってはいかんけれども、根源の世界からは自然に現象する。さつき、

「弱き者には弱き者となり、いかにもしてこれを得んがためなり」

とパウロが言った。あれは素晴らしい言葉です。

花を見れば花となり、雲を見れば雲となり、嵐を見れば嵐となる。それから今度は、あなた方は船に乗って非常に波が出て、「今日は酔うかな」なんていったら酔ってしまうよ。これは波、ごろごろならなくては。波の心となって、自分が一緒に波を見れば波となって、スーッとやってごらん、楽になるから（笑）。波と一緒に下りて一緒に上がっていく。そういうことを自分で体験してみなければね。いつか、玄界灘でそうだったよ。船の中で七、八人で話していたら、だんだん気持がわるくなって、私一人残ってしまった。それは、「酔うまい」とするのではない。波に乗るんです。波乗りというやつは、私も波乗りもできるけれども、そういう波乗りとはちがうけれどもね。

「それは、先生は水泳がうまいからそうなんですよ」

なんて、そうじゃないんだよね。とにかく、まあ人間だから、

「今日はいやな天気だな」

なんて言ったっていいさ。けれども、いやな天気の中に、

「日日好日」
じつじつこうじつ

というわけで、外が曇っていればこっちもひとつ曇っていればいい（笑）。ところが、雲の彼方に太陽がある。

“Behind the clouds, is the sun still shining.”

「雲を貫いて、それでも太陽の光はきている」



という、ロングフェローの詩がある。

「汝らは世の光なり」

「私が光だから、私を受けとってごらん。必ず灯るよ」

という。光がくれば、影がどこかへ行ってしまう。一所懸命で影を消そうとしたって、その影は消えない。これは法然が非常にこれに苦しんだ。何とかして菩提ぼだいの世界に入ろうと思うんだが、どうも煩惱ぼんのうという影が消えないので困ってしまったという。そこで「南無阿弥陀仏」になったんだけど。その「南無阿弥陀仏」で……、あれども無きが如きものになってしまう。どうぞ、そういう自在なことになってください。

●イエスは霊体として現れざるを得ない

この詩篇それ自身は大したことではないけれども、我々とはにかく、このイロハ歌を自分のものに本当にしてしまう。

7 みてその手のみわざは真実まことなり公義ただしきなりそのもろもろの訓諭みさとしはかたし

と。人間のする業はさんざん濁っているし、ゆがんでいる。選挙戦でも、人の悪口は言いたくないけれども、いろいろあるわけだ。うちの家内は一所懸命で理想選挙ではつきりと本当の道を踏んでいるから、負けても勝っても本当の勝利はこっちにあると思っている。

「汝の義」「汝の愛」「汝の憐れみ」

詩篇にこれはよく出てきます。「汝の恵み」「汝の愛いづくしみ」、これは人間の側から判断するようなものよりはるかに内容が素晴らしい。歴史において、歴史の上側はこれに反するような現象がたくさんあります。けれども、その反するような現象のもうひとつ奥の世界、即ち天界において映つているところの本当の現実。これは汝の義と汝の愛がこの歴史の奥に貫いている。これがやがて世界の終わりに審判としてやってくる。そのときにすべてが本当にわかってくる。

でありますので、この「汝の義」「汝の愛」は我々にとってはキリストです。

「キリストはわが義なり、わが愛なり」

という。前に書きましたね〔註…「ハレルヤ」第15号（1971年1月）「わが義・わが愛」〕。

これに貫かれている。これに貫かれて、この義と愛とは離すことができませんから、非常に力強い。十字架上で、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と言った時に、あれは義の叫びですから。

「なぜ、私をお棄てになるか。あなたとの関係は100%に私はやってきたつもりだが、

この私が棄てられていいか」

というわけです。

「なんぞ、棄てたまひし」



と。これは義の叫びです。そうしていて、

「彼らを赦せ」

というのは愛です。全然、反対のようところが実は反対ではない。これは本当です。十字架上の片一方の盗賊は、

「私はさんざん悪いことをしたから、十字架にかけられるのは仕方がない。せめて私を覚えてください」

と。そうしたら、キリストは

「お前は私と一緒にパラダイスに行く」

と。もう一方の盗賊は、

「あんたは神の子なら、我々をひとつ救ったらよからう」

なんて、頑なで砕けない。こいつは滅び、地獄行き。これははっきり別れる。キリストの義をいただいて、これ（砕けた方）は上へ行ってしまった。キリストの愛をいただいた。いつもそれに気がついて、自分を乗り越えて進んでいくことです。

「自分を義にしよう、自分を愛にしよう」

なんて、そんなことを整えたつてダメですよ。自分を乗り越えて、

「汝の義がわがうちにきたまえ、汝の愛がわがうちにきたまえ」

とやっていくところに、これが本当の――キリストの生命というのは質的にはこの義と愛です、大きくいえば。義と愛のない生命は生命ではないんだから、それはただ時間的に生きているだけのなし――本当に生命というのは、その生命の質は神の義、神の愛、キリストの生命です。だから、キリストは絶対に死なない、これが生きているから。十字架を通して彼は甦えらざるをえない。決まっているんだ。昔からキリスト教の註解書で大体、「いったいキリストの復活とはどういうものだろうか？」

と、一所懸命で調べている。何も調べる必要はないんだ。何も討論する必要はない。これはもうイエスみたいなひとは甦らざるをえないんです。霊体として現れざるを得ない。もう簡単なんです、非常に。ところが、今の牧師さんたちや神学者たちは、キリストの復活なんてものは受けとっていない人が多いんですよ。

「まあ、聖書に書いてあるから仕方がない」

くらい。そんなことで本当に福音の世界かという。

キリストは霊界に今もなおもの凄いの生命をもつて、霊的生命で生きておられる。

●「よしあしの葉をひつ布ひて夕涼み」

8 これらは世々かぎりなく堅くたち真実と正直とにてなれり

9 エホバはそのために救贖をほどこしその契約をとこしえに立てたまえりエ

ホバの名は聖にしてあがむべきなり



ヤーヴェー、汝は、その民、我々に贖いを施し——今言った十字架の贖い——その契約をとこしえに立て給うと。どんどん現在に読んでください。この「永遠の契約」は、十誡における契約ではないですよ、我々の契約は。新しい契約、新約だから。新しき約束はキリストを受けとる。

「この十字架・聖霊を受けとった者は永遠にわが民である」

という契約です。これは滅びない。これを受けとることは誰でもできる。何か条件が無ければ受けとれないのではない。条件があつたらこれは受けとれない。無条件。十字架の恩寵、贖いは無条件です。御霊は無条件にくる、誰にでも。誰にでも無条件にくる。受け方はいろいろですよ。受け方の現象なんかどうでもいい、そんなことは。けれども、本当に十字架は、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず、キリストわがうちにありて生きるなり」

と。キリストというのは御霊のキリスト、

「キリストの御霊が私の中で生きていますよ」

と。ガラテヤ書2章20節のパウロの言葉は永遠の真理です。私たちの福音は全くそのような意味において、旧約聖書を読んでいく。私は詩篇は、昔はかなり好きだったけれども——今でも好きだけれども——もうこの福音の光で読まなければ読めないんです。それはやっぱり旧約の限界があるからね。

10 エホバをおそるるは智慧のはじめなり これらを行うものは皆あきらかなる
聡ある人なり エホバの頌美はとこしえに失することなし

智慧は始めにして終わりだよ。汝を畏れることは智慧の始めで終わり。神さまを畏れることなしに、本当の智慧、学問——学問の始めて終わり——はない。ところが、日本の学校では宗教のことは公立では禁じている。それではいつまでたつてもダメなことに決まっている。だから、私立が非常に大事です。ところが、いわゆるミッションスクールでもダメ。だから、私みたいのが勝手にやるわけです。悪ければいつでも辞めますよと。

何か知らんけれども、神さまがキリストが入ってくると創造的に——この智慧というのはいわゆる研究の智慧ではなく——非常に創造的なことになる。インスピレーションがダングン湧いてくる。神さまは創造者ですから、その創造者と同質的なものが動いてくる。何かしたり、言ったり、考えたりすることが人真似でなくなってくるわけです。

イロハ歌でヘブライ語のアルファベットを覚えながら、これをひとつあなた方がこの内容を自分でもって何かイロハ歌にしたらよからうというわけです。

今日、黒崎先生〔註：黒崎幸吉1886～1970、『黒崎幸吉著作集』（7巻、1972～1973）〕の第5巻が非常に無教会のことをたくさん書いてある本だが、それを少し見た。無教会の、それは仰っていることは結構なんだけれども、教会であろうと無教会であろうと、それは



どっちだっていいですよ。どうせ、人間のすることはみんな不完全なんだから。

「教会の形式はけしからん。もつと形式のない生命の世界だ」

と仰ることはいいさ。また歴史的に確かに内村先生はその角度から大事な仕事はなさった。私はもちろん、内村先生やその先生方のなさった業績に対しては心から敬意を表します。みな優れた人ですから。けれども、教会・無教会という、そんな対立はいらない。

「よしあしの葉をひつ布ひて夕涼み」〔白隠筆、達磨像（草坐達磨）紙本墨画の賛〕

という句がある。白隠和尚です。やはり日本の坊さんたちは偉い。

「善いだの悪いだの、どっちが正しいだの正しくないだの」

と、そんな相対的判断をしているときはまだ本ものではない。よしであろうと、あしであろうと、善であろうと悪であろうと、どっちもいい。よしあし（蘆、芦、葦）の葉を敷いて、楽に夕涼みしている。その境地にこなければダメなんです。

「教会・無教会なんかどうでもいいよ」

と。私たちは「幕屋」というけれども、幕屋になにもこだわっているのではない。人間の相対的な在り方はどれだっていい。問題は、

「その相対的な破れの在り方の奥に本ものがきているか」

だけなんです。共産主義だろうと何だっていいよ。けれども、その奥に本当のものがなかったらダメです、その主義はどんな主義も。自分の主張のためには手段を選ばないようなことをやるからね、全く。そういうことでは、どう考えても、これは福音の世界にこなければダメなんです。もう世界は行き詰まり。キリスト教も仏教も気が抜けているから。

だから、「よしあしの葉をひつ布ひて夕涼み」と。そして自然の風にあたって、こうだい鴻大無辺な気分になって、こうぜん浩然の気を養う。キリストと神さまと溶けている。酔神酔主ようじんようしゅという。キリスト・神に酔ってしまう。お酒は要らない。

あなた方は、一流の坊さんに負けないことになるんですよ。

「二流の坊さんたちは偉かったけれども、どうもこっちはダメだ」

なんてそうじゃない。ダメなほどいい。ダメなほど本ものが入ってくる。要するに、そういった相対的な判断には絶してください。そうすると、本当の素晴らしい世界に入っていく。

●詩「わが砲兵士官」

同じ無教会の中では、あの関武思たけしさんは陸軍砲兵少佐だか中佐か大佐か知らんけれども、あれが藤井先生の非常に忠実なお弟子でした。まさか私の福音を受けるとは思わなかったけれども、非常に率直に受けとった。ちょうど「百卒長」と同じような具合に。あちらの方の教会の人が関さんの追憶集を作りたいと、私に言ってきたから、私はクダクダ書くのは嫌だから、詩を書いた。それをあなた方に読んでみます。

「大富士の広き裾野の 高原に轟く砲声！」



音絶えて既に幾年。 御殿場の東山荘ゆ
わが友は感慨深く 見はるかす演習の原。
夏期の特別集会、 天来の聖霊せまりて
聖言の中に泌み入り、 使徒たちの昔を今に
聖筵は展開しゆく。 その身には弾痕とどむる
耳遠き貴き友は 演壇の前に座を占め
全身を耳にして聴く その御影今も髣髴。
講演の終りにあたり わが友は感激に満ち
全身の力をこめて 証しせり、「これぞ福音！」
祈りせり、はらわた腸よりぞ。 明くる夏浅間山系
鹿沢なる温泉郷に 開かれし福音集会。
路遠き久留米の里より 欣然と参加せられし。
聖霊のバプテスマこそ 現代のキリスト教に
不可欠の焦点なりと あかしするわが告白に
関さんは全く共感。 キリストが百卒長の
信仰を褒めたまひける そのかみを連想せしむる
わが友の快き信！ 百万の味方の如く
欣べりわが胸の中。 無教会の友多けれど
わが告白にかく端的に 応ぜしは稀有けうのことなり。
わが恩師藤井武が この人に見し信の種子
花と咲き花と散りけり「人は武士、花は桜木。」
信実と謙遜の人、 童心と愛のたましひ、
慕したわしや関武思さん！ 孝道を全く歩み、
師道をも貫き徹し、 使徒たちのキリスト道を
鹿沢にて遂に身につけ 関さんは凱旋したり。
万歳！アーメン！ハレルヤ！ 聖名をこそわれは讃ふれ。
今よりは雲を貫き、 天来の靈光もろとも
福音の大砲の響 いんいん殷々とどよませ給へ！
天界の砲兵士官 主の僕、関武思さん！」

(1973年6月17日作、「ハレルヤ」誌第32号。著作集第8巻『詩歌集』／三 近親・師友
篇に掲載)

こういう詩です。それで、今日のお話はおしまいとします。

